



【Wa-Ong 輪音プロジェクト】

テレマン：《無伴奏オーボエのための 12 の幻想曲》より 第 3 番

テレマンの「TWV40:28」の原曲は「無伴奏ヴィオラ・ダ・ガンバのための 12 の幻想曲」の第 3 番（ホ短調）。この曲集は長らく紛失しており、2015 年にドイツの図書館で再発見されるまで「幻の作品」と呼ばれていた。単一の楽器で演奏されるが、重音奏法やアルペジオを駆使して、まるで複数の楽器が演奏しているかのような多声的な響きを醸す。全体は「緩・急・急」の 3 楽章形式で構成される。まず「Largo（またはAdagio）」は、哀愁を帯びた深い楽想を持つ序奏。続く「Presto」は、極めて速く、技巧的なパッセージが特徴。最後の「Vivace」は、軽快でリズムカルな終曲。

鹿の遠音

「鹿の遠音（しかのとおね）」は、江戸時代から伝わる琴古流（きんこりゅう）を代表する尺八の本曲。2 本の尺八による合奏曲で、秋の深山で雄鹿と雌鹿が鳴き交わす様子を叙情的に描いている。

モーツァルト：歌劇《魔笛》（オーボエ二重奏版）

第 1 幕 より「なんという不思議な笛の音だ」

第 2 幕 より「恋人か女房があればいいが」

《魔笛》はモーツァルトが 1791 年に作曲した、ドイツ語による 2 幕構成のオペラ（ジングシュピール）。王子タミーノが夜の女王の娘パミーナを救い出す過程で、様々な試練を乗り越えて、結ばれるまでを描いた冒険活劇。「なんという不思議な笛の音だ」は、第 1 幕でタミーノが口にするセリフ（独唱）。「魔笛」に魅了され、その不思議な力を実感する瞬間を描く。「恋人か女房があればいいが」は、第 2 幕で鳥刺しのパパゲーノが歌う、快活で親しみやすいアリア。

鶴の巣籠

「鶴の巣籠（つるのすごもり）」は、尺八の古典本曲を代表する一曲。雛鶴の誕生から巣立ち、親鶴の死を 2 本の尺八で描いた「標題音楽」であるが、単なる写生にとどまらず、慈しみや死生観といった深い精神性が込められている。

ブリテン：《オヴィディウスによる 6 つのメタモルフォーゼ》

オーボエ独奏曲《オヴィディウスによる 6 つのメタモルフォーゼ》は、1951 年のオールドバラ音楽祭のために書かれた。オヴィディウスの叙事詩『変身譚』にもとづく幻想的な作品で、6 つの神話的エピソードからなる。「第 1 曲：パン」は、愛するシリンクスの変身した葦笛を吹くパン（牧神）を、「第 2 曲：パエトーン」は、太陽の馬車を操ろうとして失敗し、ゼウスの雷によって撃ち落とされた若者フェートン（パエトーン）を、「第 3 曲：ニオベ」は、14 人の子供を失い、深い嘆きの中で悲しみのあまり岩に変えられた母親を、「第 4 曲：バッカス」は、女性たちの賑やかな噂話や少年の叫び声が響く、酒神バッカスの饗宴を、「第 5 曲：ナルシサス」は、水面に映る自分の姿に恋をし、ついには水辺に咲く水仙に姿を変えた美少年を、「第 6 曲：アレトウーサ」は、河の神アルフェイオスの求愛から逃れるために、泉に姿を変えられた精霊アレトウーサを、それぞれ描いている。

初代 山本邦山：尺八二重奏曲 第 3 番《對動》

初代・山本邦山（1937-2009）作曲の《對動》は、1966 年に発表された尺八二重奏曲。タイトルの「對動（たいどう）」は「対になる動き」を意味しており、その名の通り、2 本の尺八が対等な関係のもと、時には追いかかけ合い、時には激しくぶつかり合う。山本邦山はジャズ奏者としても活動していたため、伝統的な尺八の技法に、スウィング感や現代音楽的な鋭いリズムが組み込まれている。また、尺八特有の「ムラ息」や細かい装飾音が効果的に使われており、2 本の尺八が織りなす音響的な広がりを楽しむことができる。

尹 伊桑：インヴェンション

尹伊桑（ユン・イサン）の《インヴェンション》（1958）は、ドイツに留学した尹が、十二音技法という西洋の前衛手法を用いながら、韓国の伝統音楽特有のアーティキュレーションの再構築を試みた作品。全 4 楽章から構成される。第 1 楽章「Triller（トリル）」は、装飾音の一種であるトリルを

主体とした楽章。東洋音楽の「揺らぎ」を十二音技法で表現しようと試みる。第 2 楽章「Glissandi（グリッサンド）」は、音の間を滑らかにつなぐグリッサンドにより、流動的な「線」としての動きが強調される。第 3 楽章「Vorschläge（前打音）」は、前打音（装飾音）が中心となる。点描的な響きの中に、母国の伝統音楽に特有な装飾的語法が取り入れられている。第 4 楽章「Harmonie（ハーモニー）」では、2 つの楽器が作り出す垂直的な響きや干渉に焦点が当てられる。

J.S.バッハ（小畑善昭編）：無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第 2 番 より シャコンヌ

シャコンヌは「無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第 2 番」の終楽章（第 5 楽章）に置かれている。シャコンヌは、3 拍子系の古い舞曲を出自とし、バッハの無伴奏作品のなかでも屈指の名品であり、単独で取り上げられる機会も多い。冒頭で呈示される 8 小節の主題が、4 小節ずつ前半・後半に分かれて同じ和声進行を繰り返し、さらにその 8 小節の主題が 30 回にわたって変奏される。舞曲という枠組みをはるかに超えた「音楽による建築物、ともいえる世界が、一挺のヴァイオリンによって形づくられていく。今回はオーボエ奏者・小畑善昭の編曲版でお届けする。